

英語教育実践としてのバフチン(2): 人格と人格との間に

西本 有逸

(英文学科)

Bakhtin as a Praxis in English Language Education (2):
With Special Reference to Interpersonality

Yuichi NISHIMOTO

2017年11月30日受理

抄録：本稿は、バフチン理論のうち人格（личность リーチノスチ）を取り上げ、理論的考察を行う。存在という出来事の結構（〈自分にとってのわたし〉〈わたしにとっての他者〉〈他者にとってのわたし〉という関係性）の中での人格が未完なものとして強調される。次に英語教育への具体的応用について実践事例（京都教育大学附属京都小中学校教育実践研究協議会での公開授業）を紹介する。バフチンの豊かな人格理論を参照することにより、教育の本来の目的である学習者の人格形成に資する英語教育実践を探ろうとするものである。

キーワード：バフチン・人格・結構・英語教育実践

I. はじめに

「人間の文化の三つの領域—学問、芸術、生活—が統一を獲得するのはただ、それらを自身の統一のうちに参加させる人格においてである。」

(バフチン 1999: 13)

冒頭の一文は、旧ソ連の文芸学者・思想家ミハイル・バフチン（1895-1975）の処女作『芸術と責任』（1919年）からの引用である。当時のロシアン・ルネッサンスのなか、人間の文化の世界（学問や芸術）と生の生活の世界を統一する責任を人格は担いもつという意味である。人格（ロシア語 личность リーチノスチ、英語 personality）とは、このように初期バフチンから頻繁に登場する重要語である。後期バフチンに至っては、「人格、私という（かけがえのない）人間に対するその大きな意義。文化の全局面におけるひとの言葉の複合的な相関々係と活動は、人間の生のすべてを充たしている。」（バフチン 1988a: 300）、あるいは「意味とは人格的なものである。そこにはつねに問いがあり、呼びかけがあり、答の予想があって、つねに二人がいる（対話の最小限）。それは人格とは心理的なものではなく、意味的なものだということである。」（バフチン 1988b: 342）という言説がある。

バフチンは西洋哲学とりわけマックス・シェーラー（1874-1928）の哲学的人間学・人格主義を受容しながらも（Poole 2001）、当時のロシア宗教思想である東方キリスト教神学を礎えにして人格論を打ち立てていったとされる（貝澤 2002）。バフチンは当時のソヴィエト史的唯物論を信奉することなく、「神は超越的で無限な存在であるため、有限者たるわれわれにとってはどのようにしても規定することができない。この何者でも「ない」ということが、神が「ある」ということの論拠になっている」（貝澤 2002: 31）という否定神学の論理（否定することが即肯定となりうる）を徹底させ、土壇場で反転させることで否定としての超越者（神）ではなく肯定としての限定的存在者の人格を語るのである。貝澤氏はバフチンの人格論を次のようにまとめている。

「バフチンにおいて人格とは、その身体の空間的・時間的な限定性（欠如）の否定神学的反転としてもたらされる他者の触覚的身体との多数的統一、つまり全一性であって、そこでは〈私〉の身体は、つねにその表面全体が

他者の身体によって接触され、多形的に性愛化されている。(中略) 重要なのは、彼が宗教的人格論の全一性の理論的可能性を、新カント派、現象学、精神分析などとの対話的關係に投げ込み、それらを、神学的な論理と言葉で読みかえていったこと(あるいはその逆)にある。(中略) いわば宗教的人格論は、バフチンの一部でしかないという、まさにそのことによって、否定神学的にバフチンの全体となってしまっているとも言えるのである。」

(貝澤 2002: 43-44)

本稿では、バフチンの宗教的人格論についてこれ以上深入りをしない。次節以降、バフチンの結構あるいは構築術を中心に人格の問題を考察する。

Ⅱ. 結構における未完なる人格

バフチンの結構(ロシア語 *архитектоника* アルヒテクトーニカ、英語 *architectonics*)は人間の存在論に関する用語である。それは、ハイデガー(1889-1976)の『存在と時間』(1927年)あるいはサルトル(1905-1980)の『存在と無』(1943年)に先立って登場した概念である(Clark & Holquist 1984: 94)。バフチンによれば、人間は一回限りのアリのきかない、繰り返しのきかない存在の出来事としての生を生きている。存在の出来事とは、「世界のなかにその一部として出来事があるのではなく、個々の人格の貴重な唯一無二の世界どうしの相互作用という出来事として世界はある」(桑野 2013: 369)という意味である。また、「出来事」のロシア語は‘*событие*’であり、語源は‘*со-*ともに’+‘*бытие* 存在’であることから、出来事自体が‘ともに存在する’という意味になる。そこでは、「個々の人格の貴重な唯一無二の世界どうしの相互作用」のありようが、〈自分にとってのわたし〉〈わたしにとっての他者〉〈他者にとってのわたし〉が相まって構築される関係性の出来事として顕れる。〈自分にとってのわたし〉〈わたしにとっての他者〉〈他者にとってのわたし〉とは、それぞれ〈即自〉〈対他〉〈対自〉とも置き換えられよう(ヘーゲル弁証法の専門用語とは差異があるかもしれないが^{註1)})。「存在するとは、この関係のできごとのなかで、責任をもって行為することであって、行為は人格を前提とし、それは道徳的に別の人格にむけられている。(中略)存在するとは、別の意識と対話的にまじわることなのである。」(佐々木 1999b: 524-526)要するに、結構とは「具体的で唯一無二の諸部分や諸契機を眼に見えるかたちで必然的に配置し、完結したひとまとまりの全体へとむすびあわせるもの」(桑野 2013: 369)なのである。「存在のできごとの結構 *архитектоника бытия-события*—自分にとってのわたし、わたしにとっての他者、他者にとってのわたしが相俟ってかたちづくる、行為の現実世界」(佐々木 1999a: 466)の中でこそ人格は語られなければならない。

次に人格についてである。バフチンは晩年の1971年にポドグージェツのインタビューに応じて、「現在、人間の思考、人間の探究の対話的理解という領域で頂点にいるのは、ドストエフスキーです。」と述べ、ドストエフスキーとは未来のものであり、その神髄は「世界の究極の問題である真理は、単独の個人的意識の中では解明できない」こと、「真理は終わりなき対話の中でのみ明かされること、人間と人類は内的には無限のものである」としている(バフチン 1997: 6-15)。当のドストエフスキーは人格について、(バフチンはアスコリドフから引用して)「ドストエフスキーは、心から評価し共感して、〈人格であれ〉とわたしたちに話しかけている(中略)人格とは、アスコリドフによれば、文学において描写の対象となっている性格、タイプ、気質などとはちがって、並はずれて内的に自由であり、外的な環境から完全に独立している。(中略)人生そのものにおける人格の発現の仕方」が常に問題となると考えている(バフチン 2013: 28-29)。まさに、バフチンにとって人格とは「まったく新しいトータルな人間の視点—すなわちアスコリドフの言う《人格》、あるいはドストエフスキーの言う《人間の内なる人間》の視点—の解明なのである。」(バフチン 1995: 119)さらに、バフチンは人格を未完なものと考えていることに注意したい。バフチンは言う。

「人間の内には、本人だけが自由な自意識と言葉という行為をもって解明することのできる何ものかが存在しており、それは人間の外側だけを見た本人不在の定義ではけっして捉えきれないものなのである。『貧しき人々』

において初めてドストエフスキーは、いまだ不完全で曖昧な形ながら、人間の内部にあってけっして完結しない何ものかを示そうとした。(中略) 生きている限り、人間はいまだ完結しないもの、いまだ自分の最後の言葉を言い終わっていないものとして生きているのである。(中略) 人格の真の生を捉えようとするなら、ただそれに対して対話的に浸透するしか道はない。そのとき、真の生はこちらに応え、自らすすんで自由に自己を開いてみせるのである。」

(バフチン 1995: 121-123)

このように未完であり続ける人格をバフチンは「世界」にまで敷衍する。

「世界ではまだ何一つ最終的なことは起こっておらず、世界の、あるいは世界についての最終的な言葉はいまだ語られておらず、世界は開かれていて自由であり、いっさいは未来に控えており、かつまた永遠に未来に控え続けるであろう、と。」

(バフチン 1995: 333)

これは、なんと力に充ち溢れた言説であろうか。「バフチンを読むと、生きる力がわいてくる」(新谷敬三郎^{註2)}のは、バフチンの思想が平凡にして頗る非凡であるからであろう。対話、未完、開放性、未来志向性、そして自由。とりわけ、バフチンの自由はスピノザの「自由なる必然性」(自由とは認識された必然性のことをいう)を彷彿とさせる。スピノザは主著『エチカ』の第5部定理27で「この第三種の認識から、存在しうる限りの最高の精神の満足が生ずる。」(スピノザ 2004: 123)と喝破しているが、「第三種の認識」とは神の認識すなわち「自由なる必然性」のことであるから(神谷 2010: 266)、そこから生じる「最高の精神の満足」は生きる力に通底すると考えられるのだ。

本節では、最後に簡潔にはあるが、人格と言語の関係を指摘しておきたい。バフチンは主著『マルクス主義と言語哲学』(1929年)の中で、「言語が、内的人格や意識を照らし、それらを作りあげ、分節化し、深めるのであって、その逆ではないからです。主体・人格そのものも、言語によって、形成されるものだからです。(中略) 言葉(発話)が、内的人格(主体)の(外に現われた)表現なのではなく、内的人格(主体)が、内面化された言葉(内的発話)なのです。」(バフチン 1980: 344-345)と述べている。このように、言語が人格をつくる、すなわち〈言語→人格〉というベクトルは言語教育における学習者の人格形成を考えるうえで示唆に富むものである。

Ⅲ. 人格を志向する英語教育実践

本節では、2016年11月3日に開催された京都教育大学附属京都小中学校教育実践研究協議会の9年C組(中学3年に相当する)の英語科公開授業(授業者:内貴真美子教諭 単元:登場人物の気持ちを考えよう)について紹介する。授業者と指導助言者としての筆者は、義務教育学校最終学年の公開授業にふさわしい教材を文学教材に求めた。バフチンの行為としての人格理論が結晶化されている、オー・ヘンリー作『賢者の贈り物』である(出典は O.Henry. 2008. *The Gift of the Magi and Other Stories*. Pearson Education Limited.)。1905年のニューヨークを舞台に、貧しい若い夫婦がお互いのクリスマス・プレゼントを買うために自分の宝物を売ってしまう物語である(この名作は昨今、意外と中学生に知られていない)。

1. 実践(praxis)のねらい

- ・ 文学教材を用いて「主体的・対話的で深い学び」を生徒に促す。
- ・ 登場人物の行為としての人格について考える。

2. 単元目標

- ・ 心情や情景を描写した物語のおもしろさを味わうことができる。
- ・ 展開を押さえて、出来事や心情を正確に理解することができる。
- ・ 登場人物の心情を考え、表現することができる。

3. 指導計画

- ・ 第一時 物語のあらすじを把握する。(リスニング・リーディング)
- ・ 第二時 物語をキーワードや挿絵を手がかりとして英語で口頭再生する。(スピーキング)
- ・ 第三時 登場人物の行動の描写からその時の心情を読み取る。最終場面の台詞を考えることによって、物語のテーマ・作者のメッセージを理解する。(本時・深い学び)
- ・ 第四時 最終場面の台詞を入れて物語を発表(再話)する。(ライティング・スピーキング)

4. 本時の展開

【第一ステージ 着眼】

- 生徒の学習活動・・・教師の内容理解の発問に答える。 / 物語を口頭で再話する。
- 授業者の支援・・・場面ごとの絵とキーワードを示し、物語のあらすじを捉えさせる。

【第二ステージ 分析】

- 生徒の学習活動・・・ジムとデラの対話を考える。
- 授業者の支援・・・物語全体の情景や登場人物の行動・心理を意識させるためにキーワードを示す。個人やペアあるいはグループでジムとデラの対話について考えさせる。

【第三ステージ 一般化】

- 生徒の学習活動・・・special gifts とは何かを考える。
- 授業者の支援・・・ジムとデラの心理に着目させる発問をする。

5. 物語の展開とキーワード

本時では教師発話 (teacher talk) とともに黒板に貼られるキーワードをもとに、生徒が再話する活動が圧巻であった。そのキーワードを記しておく。

1. EXPOSITION: 物語の基本となる解説	1905, New York, Jim & Della, \$20, poor happy, love each other
2. CONFLICT: 問題に直面そして葛藤や苦悩	Christmas, \$1.87 buy a gift
3. RISING ACTION: 解決に向けた勇気と行動	sell her hair, \$20, treasure, chain happy
4. CLIMAX: 物語のクライマックス	Della → Jim, Jim → Della a cry of joy → a change to tears What does Della say to Jim?
5. FALLING ACTION: 冷静な判断	put away happy

6. RESOLUTION: 解決	a happy Christmas, theme devotion, sacrifice, special gifts
-------------------	---

6. 結構における人格を読み取る

バフチンの人格理論は、結構すなわち自分にとってのわたし、わたしにとっての他者、他者にとってのわたしが織りなす現実世界の中での責任ある行為・発話・声として考えてよい。本実践での教材『賢者の贈り物』の登場人物の発話あるいは語り手による描写を即自・対他・対自の視点で分類すると以下のようになるであろう。

〈自分にとってのわたし 即自〉

- “Is there anything that I can sell?”
- But now Della is thinking about her beautiful hair.
- “My hair is gone..... It’s sold and gone.” (私の髪はもうないのよ。売られてないわ。)

〈わたしにとっての他者 対他〉

- “How can I buy a special Christmas gift for Jim with \$1.87? What am I going to do?”
- “I like to see your hair every morning in the sun. At work, I think about your hair.”
- “Will you buy my hair?” ((店の女主人に向かって) 私の髪を買ってくださいる?)
- “I can give you \$20 for it.”
- “But I did it for him. I wanted a gift for him.”
- “You won’t care, will you?..... I’ve got something that you’ve wanted for a long time.”
(私の髪が短くても貴方は気にしないでしょ? 貴方がずっと欲しかったものを手に入れたわ。)
- “I couldn’t live through Christmas without giving you a gift.”
(貴方に贈り物を渡さないクリスマスなんて過ごせなかったの。)
- “I want you to understand me, Della..... I loved you with long hair and I love you with short hair.”
(デラ、わかっておくれ。僕は長い髪の君が好きだったし、短くても僕の気持ちに変わりはない。)

〈他者にとってのわたし 対自〉

- “She can also see her unhappy face in it.” (デラは窓ガラスの中に自分の不幸な顔も目にする。)
- “OK, but, please, take it quickly.”
- “Is Jim going to love me with short hair?” (ジムは髪が短くなくても私を愛してくれるかしら?)
- “Jim, don’t look at me like that. Talk to me.”
- “Don’t you like me now? I’m me, Jim. Maybe the hairs of my head can be counted, but no one can ever count my love for you.”
(ジム、ほら、私よ。髪の毛の一本一本は数えられるかもしれないけれど、私の貴方への愛は誰にも数えられないわ。)

特に波線部の発話は重要であり、学習者は登場人物の深い心情を理解する必要がある。以下に、生徒の理解の一例を記す(原文のまま。下線部は筆者による強調。)

- お互いに大切なものをなくしてまで買った贈り物がムダになり、本末転倒の結末で、かわいそうな2人だと思っていた。読み込むにつれて、2人の複雑な心境が伝わってきて本当に大切なものは形のあるものではなく「相手を大切にしたい気持ち」「相手を幸せにしたい気持ち」だとわかった。貧しさや、苦しきの中でお互いの「絆」があれば乗り越えられるかなと思った。
- 簡単な英語で書かれているが、文の奥には細かい心情が込められていて素晴らしい作品だった。またそれ

を読み解いていくのは面白い。

- 現実の話ではないのだけれど、クリスマスのプレゼントを買うために、デラが髪を切るときの複雑な気持ちとか、髪が短くなれば嫌われるのではないかと心配する気持ちとか、すごく人間味があって、現実のように思えた。また、お互いにプレゼントを交換する場面では、苦悩や葛藤が表れていた。その中で、2人はお互いに思い合っていることがわかった。全てを失った2人が「幸せ」な理由は、「互いに理解し合っている」からだと思ふ。

IV. 言語から人格へ

言語は人格形成に資する、とバフチンが説くのであれば、教育の世界では「意味と意識の生成をもたらす内言」(ヴィゴツキー^{注3})を考える(創造する)、あるいは抽象語の意味内容を考えることにより「抽象から具体への上向」(マルクス^{注4})という実践が考えられる。

1. 登場人物の内言を考える

『賢者の贈り物』の最終場面、デラがジムからもらった贈り物を開封する場面ではデラの発話はテキストにはない。描写は次の英文のみである。

“Della opens the gift quickly. And then a cry of joy; and then a change to tears.”

デラの身体内ではいわゆる情動が言語を凌駕しているわけであるが(情動の強度が大きすぎて外言が発せられていない)、時間をおいてのデラの内言を生徒に考えさせる教育的意義は十分にある。授業者の指導による生徒自身の協同学習の成果を以下に示す。

〈1班〉

Wow! You know that I have wanted these combs for a long time. But I have lost my hair, so I can't use them for a while. How stupid I am! But I'm very glad and you are the love of my life.

〈2班〉

I can't believe my eyes! Thank you. How did you know what I wanted for a long time? I'm glad for your love, but sorry I lost my hair. I'm very sorry for making you disappointed. You are the best for me.

〈3班〉

Oh! Thank you for giving me these beautiful combs! I have wanted them for a long time. But I can't use them for a while. I'm very sorry for making you sad.

〈4班〉

I'm happy to know how much you love me. Oh, my goodness! How pretty they are! I appreciate your kindness, Jim. I'm so happy that you know what I have wanted for a long time. My dream has just come true. You always make me happy. But I got my hair cut short, I'm sorry I have hurt your feeling.

〈5班〉

Wow! It's like a dream to have combs I have wanted for a long time. Oh, I have really wanted these combs. I'm very happy thanks to you. I'm sorry I can't use them right now. Don't look so sad. Oh! I can't believe, Jim. I'm very happy for your understanding.

〈6班〉

Wow! How beautiful they are! My hair is gone! I'm so sorry for hurting you. I can't use them now, but these combs are my NEW treasure instead of my hair. I can't believe my eyes. Thank you for your kindness. I'm so happy.

どの班も似通った内言を考えているが、「学習者は本文にはないデラの言葉を互いに紡ぎ出しては聴き合いつつ、人を想う気持ちを、学習者一人一人が自分の感情として捉えている。」(授業者談) ことがわかる。このように「意味づけられた言葉」(ヴィゴツキー)を創造する活動は言語教育においては極めて重要である。

2. 抽象語の意味内容を考え、「抽象から具体へ」という意味の豊饒化をめざす

『賢者の贈り物』は次の英文で終わっている。

What do we have here? The story of two people. They don't have a lot of money, but they have a lot of love. And now they are going to have a happy Christmas because they understand about special gifts. Everywhere, they are the wisest of all. They are the Magi.

「最後の special gifts とは何か。また、なぜ彼らこそが Magi なのか。」という授業者の問いに各班は以下のようにまとめている。

〈1班〉

Selfless Love! They feel happy when their partner is happy. Their lives are full of love. They can find their happiness by living together even though they are poor. Both of them can sacrifice everything for their love. Money is important, but sharing happiness is the most precious. Therefore, Della and Jim are the wisest of all anywhere.

〈2班〉

Unconditional Love! Nothing is more important than their partner's smile. They make sacrifices to keep their partner happy. Therefore, Della and Jim are the wisest of all anywhere.

〈3班〉

Kindness! They always think of each other. For example, Jim works very hard for Della. And Della always encourages Jim who is tired. It's important to understand each other. Therefore, they are the wisest of all.

〈4班〉

Compassion! Devotion is when they think about the other more than themselves. The true gift is a feeling to wish for the other person's happiness. Therefore, Della and Jim are the wisest of all anywhere.

〈5班〉

Great Love! Their own partner is more important than themselves. Both of them always want to make the other happy and they will do anything for other's happiness. They can sacrifice themselves for partner's smile. Being together is very valuable for them. Therefore, Della and Jim are the wisest of all anywhere.

〈6班〉

Pure Love! They always think about their partner more than themselves. Both of them want the other to be happy. Happiness is felt by making other people happy. Therefore, Della and Jim are the wisest of all anywhere.

“special gifts”を selfless love, unconditional love, kindness, compassion, great love, pure love に置き換え、その始点から作品全体のテーマを捉え直し、具体的に記述している様子がわかる。生徒の振り返りの一部を記しておく。

- Special Gift には「大人になったときにどのような姿であるべきか」という教訓が込められていた。
- 自分の大切なものを犠牲にできるほど、大切な人が現れたときは一生大切にしたいと思った。人にとって

最高のプレゼントとは、決して高価なものではないのだなと思った。すれ違いからジムとデラはもしかして別れてしまうのではないかとハラハラしてしまっただが、2人の「絆」がより深くなるストーリーで感動しました。物語の最終場面の Special Gift は「無欲な愛」(Selfless Love) だと思ったので、私もあまり欲を出さないようにしたいと思った。

- オー・ヘンリーの小説どころか外国文学に触れたことがありませんでした。この物語はとてもハートウォーミングな作品で、素直に感動しました。この小説が伝えたかったことのひとつとしてジムとデラの崇高な「自己犠牲」の精神があります。この学習を終えて、他人のために損得抜きで行動できる人間になりたいと思いました。
- 初めて読んだ時、わからない語句や物語の流れが難しく読みにくかった。深く読むうちに「愛」とは何かを考えさせられた。ジムとデラの愛の表現の仕方はおもしろく、感動した。大人になったとき、この物語を読んだら、また違った思いをもちそうだ。
- ジムとデラのように相手の幸せのために自分の大事な物を犠牲にするのは、本当に愛していないとできないことだし、うらやましいなあと思う。本当に良い贈り物とは、お金では買えない「愛」だった。この物語を読み始めた頃は、結局、プレゼントを使えないので、かわいそうだなと思ったけれど、そのことによって「本当に良い贈り物」とは何かがわかり驚いた。ハッピーエンドで良かった。オー・ヘンリーが伝えたかったことはとても深いことで、幸せを感じることはどういうことかわかった。

V. おわりに—人格と人格との間に—

本実践のねらいは、文学教材を用いて「主体的・対話的で深い学び」を生徒に促すことと生徒が登場人物の行為としての人格について考えるということであった。前者については、深い学びとは教材ひいては教育内容に規定されるのであって、アクティブラーニングが標榜するような教育方法や授業形態に拠るものではないことを確認できた。英語教育における文学教材の存在感が薄れゆくなか、本実践は貴重であると言えよう。後者については、デラの人格とジムの人格、そして両者が織りなす行き違いと最後の場面でのカタルシスを生徒は十分に理解することができたと言えよう（授業者は授業中、人格・結構・自分にとってのわたし（即自）・わたしにとっての他者（対他）・他者にとってのわたし（対自）などの専門用語を一切使用していない。）。

最後に、バフチンの晩年の「人格の創造的な核」について述べたい。

「理解とは他人の言葉が《自分＝他人》のになるということ。現存在の外にあるという原理。理解される主体と理解する主体、創り出し理解し創造的に再生する時空間の複合的な相関々係。人格の創造的な核にまで辿りつき潜りこむことの重要さ（人格の創造的な核において生き続ける、つまり不死）。（中略）ここにあるのは人格の必然的に自由な自己開示である。そこには内なる核というものがあって、それは喰いつくすことも使い果すこともなく、しかも常に距離が保たれていて、その核とかかわるには、ただひたすらなる私心のなさがあるだけである。（中略）（そこで考えられなければならぬことは共感と愛の意義である。）」

（バフチン 1988b: 340-344, 下線部は筆者による。）

上記の「現存在の外にあるという原理」「しかも常に距離が保たれていて」とは外在性（ロシア語 *внезаходимость* ヴニナハヂーマスチ、英語 *outsideness*）を指す。唯一無二の人格どうしは互いの外在性を担保として創造力を発揮するのだ（西本 2017: 192）。また、『賢者の贈り物』には「人格の必然的に自由な自己開示、内なる核、それは喰いつくすことも使い果すこともなく、ただひたすらなる私心のなさがあるだけである、共感と愛の意義」これら全てが豊饒化されて詰まっている。デラとジムの自己犠牲の行為は貧しさゆえの行為では決してない。貧しさとは独立した人格としての自由な行為、「人格の必然的に自由な自己開示」「私心のなさ」「愛」に他ならない。人格と人格との間に—この眼差しこそがバフチンの対話原理の真骨頂であり、人間が人間たる所以である。人「間」は人格と人格との間に何かしらのものを「創造」するからである（Nishimoto 2009）。

謝辞

本稿の執筆にあたって、京都教育大学附属京都小中学校の内貴真美子教諭には貴重な資料をご提出していただいた。ここに謝意を申し上げる次第である。

注

1. もっとも、バフチンはヘーゲル弁証法を対話ではなくモノローグとしている。「弁証法は対話から生れた、改めてより高い段階において対話へ戻るために（人格たちの対話）。ヘーゲル『精神現象学』のモノローグ性。徹底的に克服されていないディルタイのモノローグ性。」（バフチン 1988b: 328）あるいは「バフチンの立場の中に、フォルマリストのカント主義に対抗して、ヘーゲル（自/他の弁証法）の存在だけを探し求めるのは無駄かも知れない。」（クリステヴァ 1997: 88）を参照のこと。
2. 「『バフチンを読むと、生きる力がわいてくる』とは、新谷先生がつねづね口にされていたことだ。」（佐々木 1999b: 527）を参照した。
3. バフチンと同時代に活躍したヴィゴツキー（1896-1934）は主著『思考と言語』（1934年）を次の象徴的な文章で締めくくっている。「言葉は、意識のなかでは、フォイエールバッハの言う、一人の人間では絶対的に不可能であり、二人で可能なものである。言葉は、人間の意識の歴史的本性の直接的表現である。意識は、太陽が水の小さな一滴にも反映されるように、言葉のなかで自己を表現する。言葉は、小世界が大世界に、生きた細胞が生体に、原子が宇宙に関係するのと同じ仕方で、意識に関係する。言葉は、意識の小世界である。意味づけられた言葉は、人間の意識の小宇宙である。」（ヴィゴツキー 2001: 433-434）
4. 「マルクスにとって、具体的なものとはなによりも発達したものを意味する。発達をもたらす差異であり、対象の二つと無い、つまり歴史的な単独性を意味する。」（茂呂 1999: 71）

引用文献

- バフチン, M. M. 1980. 『ミハイル・バフチン著作集 4 言語と文化の記号論』 東京: 新時代社
- バフチン, M. M. 1988a. 「1970-71年の覚書」『ミハイル・バフチン著作集 8 ことば 対話 テキスト』に所収 東京: 新時代社
- バフチン, M. M. 1988b. 「人文科学方法論ノート」『ミハイル・バフチン著作集 8 ことば 対話 テキスト』に所収 東京: 新時代社
- バフチン, M. M. 1995. 『ドストエフスキーの詩学』 東京: ちくま学芸文庫
- バフチン, M. M. 1997. 「多声的な言葉—バフチンとの会話」『ミハイル・バフチンの時空』に所収 東京: せりか書房
- バフチン, M. M. 1999. 「芸術と責任」『ミハイル・バフチン全著作第一巻』に所収 東京: 水声社
- バフチン, M. M. 2013. 『ドストエフスキーの創作の問題 付: より大胆に可能性を利用せよ』 東京: 平凡社
- Clark, K., & Holquist, M. 1984. *Mikhail Bakhtin*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 貝澤哉 2002. 「身体・声・笑い—ロシア宗教思想とバフチンの否定神学的人格論—」『思想—バフチン再考』 No.940, 25-46.
- 神谷栄司 2010. 『未完のヴィゴツキー理論—蘇る心理学のスピノザ』 大津: 三学出版
- クリステヴァ, J. 1997. 「廃墟化された詩学」東浩紀(訳)『ミハイル・バフチンの時空』に所収 東京: せりか書房

- 桑野隆 2013. 『ドストエフスキーの創作の問題 付：より大胆に可能性を利用せよ』の訳注 7 東京：平凡社
- 茂呂雄二 1999. 『認識と文化 6 具体性のヴィゴツキー』 東京：金子書房
- Nishimoto, Y. 2009. A pedagogically motivated framework of ontology in the cultural-historical theory: Emoting, languaging, and authoring the world. A keynote address at the 10th International Vygotsky Conference in Moscow.
- 西本有逸 2017. 「英語教育実践としてのバフチン(1)：外在性について」 京都教育大学教育実践研究紀要 第17号 pp.191-197.
- Poole, B. 2001. From phenomenology to dialogue: Max Scheler's phenomenological tradition and Mikhail Bakhtin's development from 'Toward a philosophy of the act' to his study of Dostoevsky. In K. Hirschkop & D. Shepherd (Eds.), *Bakhtin and cultural theory* (pp.109-135). Manchester: Manchester University Press.
- 佐々木寛 1999a. 「行為の哲学によせての訳注」『ミハイル・バフチン全著作第一巻』に所収 東京：水声社
- 佐々木寛 1999b. 「バフチンと1920年代前半のロシア」『ミハイル・バフチン全著作第一巻』に所収 東京：水声社
- スピノザ, B. 2004. 『エチカ(下)』 畠中尚志(訳) 東京：岩波書店
- ヴィゴツキー, L. S. 2001. 『新訳版・思考と言語』 柴田義松(訳) 東京：新読書社